



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

第8号 2000年6月発行

〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: (03) 3418-4933
編集/発行: 広報部

心は燃えていたのではないか



牧師 陣内厚生

聖書とは、なんと偉大な書物なのだろう、と改めて考えさせられる経験でした。それは近寄りたく、私たちの及ぶところではないと言うより、聖書に近づいてみて、なるほどこれは私たちに親しく語られているものすごい神のメッセージだということを知ったのでした。

「聖書全巻リレー朗読会」と銘うって、教会に提案し、「キリスト聖誕二〇〇〇年に——聖書を読む」とのコンセプトで、去る四月三〇日正午から五月四日まで実施したのです。私自身は六年前の経験から、「成算あり」と信じて臨みましたが、初めてのことゆえ、疑問視や不安を覚える人たちもあって、教会としては実行委員会による祈りと準備に委ねるほかはありませんでした。果たせるかな、開始数日前には見事に態勢が整い、アクシデントもなく、所期の目標が十二分に達成できた、その成功を感謝するものです。

私は、教会がこれに取り組む意味を、七項目挙げました。皆でリレーをして朗読するということは——、

①二〇〇〇年に教会が改めて神のみ言葉を聴くこと。

②信仰共同体としての教会がみ言葉に仕えるという告白(応答)を表わすこと。

③共に主の体の肢につながる連帯感を覚えること。

④今年をヨベルの年と重ね、み言葉から教しと癒しを実感すること。

⑤聖書全巻を通じて、永遠の都エルサレムをめざす「内なる巡礼の旅」を体験すること。

⑥非信徒である家族や友人を朗読に誘うことにより、み言葉に触れてもらおうという、最良の伝道の好機であること。

⑦この朗読が個人々の信仰生活の歴史の中に刻まれ、それが確信の基となること。

以上のポイントはすべてこの朗読会の中で具現化したのです。

思い起こせば、全員で斉読した創世記第一章。神の原初のみ言葉が語られ、早くも私たちは圧倒されたではありませんか。そのみ言葉の裏づけとなるべき救済の歴史が、神のみ手によって起こされ、語られ続けています。

教会学校の生徒がたどたくしく読む声にも、高齢の先輩信徒の朗誦に

も、聖霊が共に働き宿り、つねに励まして下さいました。だからこそ、あの詩篇作者や、預言者たちの心が乗り移ったように、すばらしい朗読が続行されました。

朗読ということは、黙読とちがって、み言葉本来の持つ「イスラエルよ、聞け」という命令を、口と耳から、魂に伝達されるものです。朗読する人の中には、み言葉の前に抱えられて、感きわまつて涙する人もあり、聴く側も思わずこみ上げてくるものを感じたこともありました。また深夜の時間帯は、静寂の中に聞こえてくるのがみ言葉のみ、敬肅な神との対峙のひとつを体験できました。私にとつては、実に霊の高嶺を旅する心地でもあったのです。

この期間、深夜から明け方まで教会員のご夫君(非信徒)が着席され、二晩も熱心に聴いておられたのが強く印象に残りました。その他たくさん逸話も生まれました。だからこそ黙読録を読み終える瞬間、多くの参加者が、実行委員たちが、感動の涙を禁じ得ませんでした。

「アーメン、主イエスよ、来てください」。